〔駒沢女子大学　研究紀要　第22号　p.55 ～ 67　2015〕

文末・文節末の「つ・ツ」表記の変遷に関する一考察

石　川　　創*

Considerations Relating to the "*Tsu*" Notation (as *Sokuon*) at the End of a Sentence or Segment

So ISHIKAWA*

Abstract

In the case of an interjection, instances such as " あっ , えっ ", etc., have been acknowledged to be one word, in a form with a "*tsu*" as *sokuon* at the end of a word. However, as the author has identified from previous research, in actual conversation, it is not possible to differentiate sounds that correspond to an "end-of-word *sokuon*". Nevertheless, in novels, comics, etc., the "*tsu*" notation is often seen at the end of a sentence or a clause rather than as an interjection at the end of a word.

This paper investigates literary journals, documents with transcriptions of sounds, and documents with Japanese written in Roman letters beginning from the Meiji period. It observes the transition of the "*tsu*" notation at the end of a sentence or a segment in Japanese.

キーワード：促音　語末　感動詞　オノマトペ　ローマ字表記

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

先行研究においては，「あ」や「え」などの感動詞に対し，より「強い感動」や「驚き」などを表す感動詞として，語末に促音が付加された「あっ」や「えっ」などの語が存在するという考え方が一般的であった。これに対し，筆者はこれまでの研究[1]において，現代日本語においては「語末促音」という音韻を聞き分けることができず，意味を弁別する要素にはならないことを指摘し，実際に「あっ，えっ，……」などの語末促音語形と，「あ，え，……」などの非語末促音語形を弁別できないことを，聞き取り調査によって示した。

感動詞の語末促音語形の問題は，「語」のレベルにおけるものであるが，「文」のレベルにおいても，「わたしはっ，そのように思いますッ。」（作例）などのように，文末や文節末に「つ・ツ」表記（「促音」を意図した「っ・ッ・つ・ツ」表記）がなされる場合がある。感動詞の場合とは異なり，「はっ」や「ますッ」が，「は」や「ます」とは異なる機能を持つ別語であるとされることはないが，「文末や文節末の促音」の有無を聞き分けることはできないという点において

*人文学部 日本文化学科

は，感動詞の語末促音と同様である。上述した聞き取り調査（注1）においても，感動詞のみならず，発話末の「促音」にあたる成分を聞き分けることができないことを示す結果が出ている。

本稿では，話しことばにおいて意味を弁別する要素にならない文末・文節末の「つ・ツ」表記が，近代以降どのように定着していったのかを，文芸雑誌や漫画雑誌などにおける表記を調査し考察する。

1.2.「文末・文節末の『つ・ツ』表記」の定義

本稿でいう「文末・文節末の『つ・ツ』表記」とは，たとえば「はいっ，今すぐにっ，まいりますッ。」（作例）のように，「文末や文節末に，促音を表す『っ・ッ・つ・ツ』表記が付されたもの」であるが，より正確に述べるならば，「促音を表そうとしているにもかかわらず，その促音を具現する具体的な単音が想定できない文末・文節末（あるいは語末）の『っ・ッ・つ・ツ』表記」である。

たとえば「あっと声をあげる」（作例）のように，「つ・ツ」表記の直後に，文を受ける格助詞「と」などが記されている場合，本稿では文末・文節末の「つ・ツ」表記とはしない。「と」があるならば，促音部分の発音が「と」の子音に確定するからである。

その一方で，「『きゃっ』と悲鳴をあげる」，「危ないッ，という声が聞こえた」，「あっ　と声をあげる」，（いずれも作例）などのように，当該の表現がかぎ括弧や句読点，感嘆符・疑問符等の記号，空白などが「と」の前に表記されている場合は，「つ・ツ」表記が後の成分から独立しており，その発音を定めることができないものとみなし，文末・文節末の「つ・ツ」表記の用例に含めた。それに関連して，「バタンッ，と扉がしまる」（作例）のようなものや，漫画作品において，漫画に書き添えられる「くすっ」，「フワッ」，「ドカッ」のようなオノマトペについても用例とした。

以下，「文末・文節末の『つ・ツ』表記」という場合，上記の条件に合致する表記のことを指すこととする。

2. 近代の文芸雑誌における文末・文節末の「つ・ツ」表記

2.1. 雑誌『太陽』における文末・文節末の「つ・ツ」表記の再調査

本節では，主に近代における文芸雑誌を調査し，文末・文節末の「つ・ツ」表記の状況がどのように推移していったかを観察する。

以前に筆者は，国立国語研究所編『太陽コーパス』[2]を用いて，本文を以下の12の文字列（記号はいずれも全角）で検索し，雑誌『太陽』（博文館，1895-1928）のうち，1895，1901，1909，1917，1925年の各年における文末・文節末の「つ・ツ」表記の使用状況を調査した[3]。

つ。　つ、　つ！　つ？　つ」　つ』
ツ。　ツ、　ツ！　ツ？　ツ」　ツ』

本稿ではあらためて『太陽コーパス』の本文を，全文検索システム『ひまわり』[4]を用いて調査したが，その際に「つ　」および「ツ　」（“「つ・ツ」＋全角スペース”。半角スペースでは用例なし）の二つを検索の文字列に加えた。さらに本稿では，前回の調査では対象としなかった「こ、こ、こ、此の、か、か、かツ、かんざし、ど、ど、何処に有つた。」（渡部霞亭「銀釵」，第1巻第12号。下線は筆者による。表1では「その他」に該当する）[5,6]のような，「語」未満のものを用例としたため，以前の調査に比べ，用例数が微増している。なお上記の文字列について，小書きの「っ・ッ」でも同様の検索を行ったが，用例は見つからなかった。表1は，今回の調査結果を整理したものである[7]。「備考」欄には，『太陽コーパス』が対象とする雑誌の巻号を示した。

（表1：雑誌『太陽』における文末・文節末「つ・ツ」表記）

発行年	文字数	感動詞	オノマトペ	その他	計	備考
1895	3,335,367	3 (33.3)	1 (11.1)	5 (55.6)	9 (100.0)	第1巻1-12号，全12冊。
1901	3,154,563	98 (88.2)	0 (0.0)	13 (11.7)	111 (100.0)	第7巻1-14号（臨時増刊2冊を除く），全12冊。
1909	2,860,352	45 (78.9)	0 (0.0)	12 (21.1)	57 (100.0)	第15巻1-16号（臨時増刊4冊を除く），全12冊。
1917	2,647,455	16 (55.2)	0 (0.0)	13 (44.8)	29 (100.0)	第23巻1-14号（臨時増刊2冊を除く），全12冊。
1925	2,453,905	56 (74.7)	0 (0.0)	19 (25.3)	75 (100.0)	第31巻1-14号（臨時増刊2冊を除く），全12冊。

表中，「感動詞」・「オノマトペ」・「その他」・「計」の欄における上段の数字は用例数，下段の数字は百分率（小数第二位以下四捨五入）である（以下の表も同様）。

用例の内訳を，「感動詞」・「オノマトペ」・「その他」と分けたのは，現代日本語において，感動詞とオノマトペは，一般に語末促音語形が存在すると認識されており[8]，その他の用法とは区別した方がよいと考えたからである。なお当該の語を「感動詞」と認定するか否かは，前回の調査（注3）と同様に，その語が現代の小型国語辞書28冊に感動詞として掲載されているかに基づき，さらに一部の笑い声や叫び声についても「感動詞」に含めた[9]。「その他」は文字通り，感動詞およびオノマトペ以外の成分に後接する「つ・ツ」表記の例であり，助詞・助動詞や用言，呼びかけの語などにつくことが多い。これは以降の節でも同様である。

表1を見ると，全ての年代を通じてオノマトペの用例はほとんど見られないことが分かる。オノマトペの語末促音語形は，大半が助詞「と」（まれに「て」）が直に接続するかたちで使用されている。今回の調査における「オノマトペ」の唯一の例は，「花火線香を点して上げませう，それ，シユツ，シユツて，始めは松葉で，それから薄になります，」（三宅青軒　「門納涼」，第1巻第8号。下線は筆者による）である。

「その他」の用例は，1895年から1925年にかけて漸増しているが，「基本的には感動詞の末尾に用いられていた『つ・ツ』表記が，次第に助詞・助動詞，また用言の末尾などにも使用されるようになっていった」と論ずる根拠とするには，十分な数とはいえない。

用例数の少ない1895年・1917年において，「その他」の用例の割合が高くなっているものの，他の年代では「感動詞」の用例の割合が約4分の3から9割弱となっており，基本的に文末・文節末の「つ・ツ」表記は，感動詞に用いられるのが一般的であったといえる。

なお，文末・文節末の「つ・ツ」表記を用いた著者は，1895年が4名，1901年が7名，1909年が8（＋著者名不詳1）名，1917年が12（＋著者名不詳1）名，1925年が20（＋著者名不詳4）名である[10]。以前の調査（注3参照）でも指摘し

たように，用例自体は1901年がいちばん多いが，全111例のうち，広津柳浪と内田魯庵によるものが76例を占めているなど，一部の著者による使用が目立つ。1917年や1925年には，用例に関わる著者の数が増えており，文末・文節末の「つ・ツ」表記が一般に定着していったように見える。

以上，雑誌『太陽』における文末・文節末の「つ・ツ」表記について観察した。次節では，『太陽』と同時期の雑誌『白樺』を観察し，同様の傾向が見られるかを調べる。

2.2. 雑誌『白樺』における文末・文節末の「つ・ツ」表記

本項では同人雑誌である『白樺』（洛陽堂1910-17，白樺社1917-23）における文末・文節末の「つ・ツ」表記を調査する。前項で利用した『太陽コーパス』が6～8年の間隔で調査しているのにならい，本稿では1910，1917，1923年の各年に発行された全ての号を確認した[11]。表2は，その調査結果を整理したものである。

表2のうち，「備考」欄には調査に用いた雑誌の巻号を示している（以下の表も同様）。また，「ページ総数」の欄の数字は，各号に記されている最後のページ番号を合計したものである。判型や組版などによって1ページあたりの文字数はかわり，この『白樺』における「つ・ツ」表記の1ページあたりの出現頻度を他の雑誌と単純に比較することはできないが，おおよその目安にはなるであろう。なお，雑誌『白樺』の判型は菊判である（復刻版による，注11参照）。

（表2：雑誌『白樺』における文末・文節末「つ・ツ」表記の用例）

発行年	ページ総数	感動詞	オノマトペ	その他	計	備考
1910	1,097	5 (50.0)	3 (30.0)	2 (20.0)	10 (100.0)	第1巻1-9号。全9冊。
1917	2,081	66 (98.5)	1 (1.5)	0 (0.0)	67 (100.0)	第8巻1-12号。全12冊。
1923	951	7 (87.5)	1 (12.5)	0 (0.0)	8 (100.0)	第14巻1-8号。全8冊。

今回調査した『白樺』の各年と，それと時期の近い『太陽』の各年（1909，1917，1925年）を比較すると，用例の数・割合の増減についてあまり共通点が見られない。まず『太陽』にある程度見られた「その他」の用例が，『白樺』にはほとんど存在しない。また，文末・文節末の「つ・ツ」表記の用例に関わった著者の数は，1910年が6名，1917年が9名，1923年が5名であり，1917年のページ総数は，他の1910・1923年の約2倍であることを考慮しても，後の時代になるほど人数が増えていた『太陽』の傾向とは一致しない。このことは，『太陽』における文末・文節末の「つ・ツ」表記の使用の傾向を，そのまま近代における「つ・ツ」表記の傾向と見ることはできないことを表しているといえよう。

なお，1917年の用例が他の2年に比べ多いが，67例のうち57例が，近藤経一（35例），長与善郎（12例），武者小路実篤（10例）の3名の著者によるものである。さらに，近藤経一の35例の

うち，34例は戯曲「ルクレシア」（第8巻第5・6号）のものであり，また長与善郎の12例はすべて戯曲「項羽と劉邦」（第8巻第1・2・4・5号），武者小路実篤の10例はすべて戯曲「かち＼／山と花咲爺」[12]（第8巻第7号）のものである。このように，この年は，特定の作者による戯曲作品における用例が非常に多い。ちなみに1910・1923年には，戯曲作品における文末・文節末の「つ・ツ」表記の用例がなかった。戯曲作品自体が掲載されていないというわけではなく，特に武者小路実篤は1910年に「ある家庭」，「無知万歳」，「夢」（第1巻第2，6，8号）等の戯曲も執筆しているが，これらの作品中には文末・文節末の「つ・ツ」表記の用例がなかった。このように，同じ著者でも作品によって，「つ・ツ」表記の使用にゆれが見られた。

以上，雑誌『白樺』における文末・文節末の「つ・ツ」表記の特徴を観察した。次項では，その他の文芸雑誌について触れるとともに，本節の調査に関するまとめを行う。

2.3. その他の近代文学における「つ・ツ」表記の特徴

前項では，雑誌『太陽』ならびに『白樺』における文末・文節末の「つ・ツ」表記の傾向が一致しないことを述べた。これは他の雑誌を観察しても同様であり，たとえば雑誌『文藝戰線』（文藝戦線社，1924-30）のうち，1924年に発行された第1巻第1号から第7号（いずれも菊判，復刻版による。注13参照）においては，計415ページの中に，13名の著者による109例（「感動詞」45例，「オノマトペ」8例，「その他」56例）の文末・文節末の「つ・ツ」表記が見られる[13]。『白樺』において，1923年発行の8冊・全951ページの中に，5名の著者による8例しかなかったのに比べると，使用頻度が非常に高いといえる。

ただし，この『文藝戰線』においても，一部の著者に用例のかたよりが見られる。第1巻第4号所収の今野賢三の小説「老婆の死から」は全11ページの作品であるが，その中に文末・文節末の「つ・ツ」表記が49回出現する。以下はその一例（p.11）である。

> （吉田がこれを知つたら！　どんなに驚き悲しむんだらう！　吉田ツ！　失望するなよツ！　いいかツ！　貴様の心はわかつてゐるぞツ！　おれたち共同の敵のために立派な犠牲だツ！……）

なお今野賢三は，第1巻第1号（1924年6月）の小説「汽笛」において，文末・文節末の「つ・ツ」表記を全12ページ中5回使用しており，これは「老婆の死から」に比べるとかなり少ない数である。今野賢三は「老婆の死から」において，意図的に文末・文節末の「つ・ツ」表記を多用したと考えられる。なお上述の通り，『文藝戰線』の第1巻第1-7号における全109例のうち，「その他」の用例が56例ある。これは『太陽』や『白樺』に比べると非常に高い割合であるが，このうち43例がやはり今野賢三によるものである。

これまで見たように，明治期から大正期の文芸雑誌における文末・文節末の「つ・ツ」表記には大きなゆれが観察される。今回の調査のかぎり，文末・文節末の「つ・ツ」表記は，大正期以前の文芸誌においては基本的に感動詞の用例が多いこと，また一部の著者が多用する傾向にあることがいえる。

3. 漫画雑誌『小学二年生』に見る文末・文節末の「つ・ツ」表記の変遷

本節では，近代以降の漫画雑誌における文末・文節末の「つ・ツ」表記について考える。本稿では，大正末期から現在までの漫画雑誌を通時的に観察するために，雑誌『小学二年生』（小

学館）を調査することとした。

『小学二年生』は，1925-42年の第一期（第1巻第1号～第17巻第10号）と，1946年以降現在まで刊行が続く第二期（第1巻第1号～）とに分けることができる（「第一期」・「第二期」は本稿における便宜上の呼称）。調査には国立国会図書館蔵の資料を利用した[14]。その一部は，国立国会図書館の憲政資料室にて提供されている，メリーランド大学所蔵の「プランゲ文庫」の資料[15]である。

表3・4は，今回調査した『小学二年生』第一期・第二期[16]の一部の号における文末・文節末の「つ・ツ」表記の用例数を整理したものである[17]。「備考」欄では，用例における「読み物」と「まんが」の内訳を示している。「読み物」としたのは，小説・戯曲をはじめとする文章作品のことであり，「まんが」は文章の形式をとっておらず，漫画のそばにふきだしやかぎ括弧でくくられたせりふが付されているものを指す。「読み物」の挿絵中に記されたものも，「まんが」の用例に含めた。なお判型は時期によって異なる[18]。

（表3：『小学二年生』・第一期における文末・文節末「つ・ツ」表記の用例）

発行年	ページ総数	感動詞	オノマトペ	その他	計	備考
1925	30	2 (25.0)	0 (0.0)	6 (75.0)	8 (100.0)	読み物5例，まんが3例。第1巻第1号。
1929	62	4 (66.7)	0 (0.0)	2 (33.3)	6 (100.0)	読み物6例，まんが0例。第5巻第4号。
1937	212	29 (61.7)	0 (0.0)	18 (38.3)	47 (100.0)	読み物32例，まんが15例。第13巻第2・8号。
1940	224	5 (55.6)	0 (0.0)	4 (44.4)	9 (100.0)	読み物9例，まんが0例。第15巻第11・12号。

（表4：『小学二年生』・第二期における文末・文節末「つ・ツ」表記の用例）

発行年	ページ総数	感動詞	オノマトペ	その他	計	備考
1946-50	658	87 (88.8)	2 (2.0)	9 (9.2)	98 (100.0)	読み物31例，まんが67例。当該期間中の16冊[19]。
1955	198	16 (69.6)	2 (8.7)	5 (21.7)	23 (100.0)	読み物5例，まんが18例。第11巻第1号。
1960	192	46 (64.8)	24 (33.8)	1 (1.4)	71 (100.0)	読み物3例，まんが68例。第16巻第1号。
1980	268	96 (42.5)	101 (44.7)	29 (12.8)	226 (100.0)	読み物11例，まんが215例。第36巻第1号。
2000	232	61 (32.1)	89 (46.8)	40 (21.1)	190 (100.0)	読み物1例，まんが189例。56巻1号。

第一期において，用例数は1937年がもっとも多いが，ページ総数に対する用例数の割合からすれば，1925年がいちばん高い。ただし用例は一部の作品に集中しており，全8例のうち5例が「小ビトジマト大ビトジマ(一)」(読み物，著者不詳)のものである。以下にその一節を示す(第1巻第1号，p.24)。

『ヤツ！イハダツ！タイヘンツ！』
ト　オホキナコエデサケビマシタ。
『ナニツ！イハダツテ！』

また，1937年については「その他」が18例と多いが，このうち12例が高垣眸「突進豆タンク」(読み物)の用例であり，これも全体的な傾向とはいえない。今回の調査のかぎり，第一期における文末・文節末の「つ・ツ」表記の増減について，特定の傾向は見られない。

しかし第二期になると，「つ・ツ」表記の使用傾向に，大きな変化が生じる。オノマトペの用例が増え，特に1960年以降のオノマトペの使用率の増加が顕著である。これは漫画作品において，たとえば登場人物が振り返る漫画のそばに，「くるっ」のような語末促音語形のオノマトペを書き添えられるようになったことが大きな原因である。「読み物」において，「*くるっ振り返る」が非文であるのに対し，漫画では「くるっと」と書かれることはなかったために，本来助詞「と」に後接することが前提であったオノマトペの語末促音語形が，そのままの形で使用される機会が急増したわけである。

1960年にはすでに「オノマトペ」の用例が多く現れていることから，第二期の初期において特徴的な変化が現れているのではないかと考え，1946-50年については特に多くの号を調査したが，この5年間においては第一期と大きく異なる結果は見られなかった。また1955年においても「オノマトペ」の用例は少ないため，1950年代後半ころからオノマトペの語末促音語形を漫画に書き添える用例は一般化したものと考えられる。

そのほかの特徴として，1980年と2000年には，「その他」の用例が増加しているということがある。第一期から一定の用例数はあったが，この両年については用例が多いことに加え，1980年には7名，2000年には9名の著者が「その他」の「つ・ツ」表記を使用しており，一般的な用法として定着していった様子が見える。

なお，「読み物」と「まんが」において，「読み物」における用例の割合があとの年代になるほど低くなるが，これはあとの年代になるほど，雑誌中に「まんが」作品が増えているためであり，小説作品をはじめとする「読み物」において，文末・文節末の「つ・ツ」表記が用いられなくなっていったことを示すものではない。

以上，本節では雑誌『小学二年生』における文末・文節末の「つ・ツ」表記を調査した。今回調査した冊数は多いとはいえず，また『小学二年生』は児童向けの雑誌である。漫画雑誌における「つ・ツ」表記の変遷をより詳しく明らかにするためには，近代から現代にかけて刊行された，多くの漫画雑誌を幅広く観察する必要がある。

4. 近代におけるローマ字表記の日本語

本節では，近代において日本語をローマ字で表記した資料を観察し，外国人の文末・文節末の「つ・ツ」表記に対するとらえかたを考えたい。そのために，まずジョサイア・コンドル(1852-1920)[20]による落語・講談速記等のローマ字表記資料を観察する。

早稲田大学図書館には，「大正十二年六月四日 故コンドル博士記念表彰會　氏 寄贈」の印および記載のある資料群が所蔵されている。全

てローマ字によって手書きされたものであり，三遊亭円朝の落語を中心に，講談や滑稽本にまで及ぶ。今回の調査のかぎりでは，資料中に署名は見つからなかったものの，おそらくこれがコンドルによる書き起こしと見てよいであろう。本節ではこれらの資料を観察し，文末・文節末の「つ・ツ」表記をどのように処理しているかを調査する。本稿で対象としたのは以下の三種の資料である。

(1) 『Dōchū hizakurige』：全一冊。十返舎一九『東海道中膝栗毛』の初編をローマ字表記したもの。底本は明らかでないが，『浮世道中膝栗毛』全五冊（諧文堂，1882）とほぼ内容が一致する。また，本稿では『道中膝栗毛』8編続12編（椀屋喜兵衛ほか，1802-22）とも対照した[21]。

(2) 『Ezo. Nishiki. Kokyō no Ie-zuto』：Part1・2の二冊組。底本は明らかでないが，三遊亭円朝口述・小相英太郎速記『蝦夷錦古郷の家土産』（金泉堂，1888）とほぼ内容が一致する（「San-yūtei Enchō kuju」，「Koai Etarō sokki」の記述あり）[22]。全三十八回中，Part 1の第十二回までを調査した。

(3) 『Kumokiri』：Part I・II・IIIの三冊組。底本は明らかでないが，松林伯円講述・酒井昇造筆記『雲霧』（鈴木金輔，1890）とほぼ内容が一致する（「Shōrin Hakuen kōen」の記述あり）[23]。全十六回中，Part IIの第四回までを調査した。

なお，コンドルの語中の促音に関するローマ字表記法は基本的にヘボン式と一致しており，「watchi」（わつち），「patto」（パツと），「kesshite」（決して）など，「ch」の前でのみ「t」，その他は後接の子音字を重ねて表記している。ただし「is-sō」（一鎗），「it-totsu」（一突）のように，促音部分にハイフンを記しているものもある。

上記の資料を調査したかぎりでは，コンドルのローマ字表記における文末・文節末の「つ・ツ」表記の処理は，二つに分けられる。それは，文末・文節末の「つ・ツ」表記をローマ字表記に反映させない場合と，“t”表記する場合である。以下に『東海道中膝栗毛』と『雲霧』における例を掲げる（ルビは省略，以下同様）。

北「ヱゝいめへましいペツ／＼
（『浮世道中膝栗毛』一，五丁裏・『道中膝栗毛』初編，二十三丁裏）
Kida. “Ee! imee-mashii, peppe.”
（『Dōchū hizakurige』，p.119）

石子「チヨツ（舌打）失敬な奴だ天下の役人に其様な奇麗ナ者が有るか
（『雲霧』第四回，p.62）
Ishiko. “Chot (shitauchi) shikkei na yatsu da ! Tenka no Yakunin ni sonna kirei na mono ga aru ka ?”
（『Kumokiri』Part II，Dai IV Kwai，p.15）

『雲霧』においては，他にも「両人『ハツ……畏まり奉る』」（第四回，pp.64-65）を「Ryōnin. “Hat … kashikomari tatematsuru” to,」（Part II，Dai IV Kwai，p.20）とするなど，「ハツ」（感動詞）を，「Hat」と表記する例が複数見られる。また，厳密には本稿における文末・文節末の「つ・ツ」表記の条件には合致しないが，『蝦夷錦古郷の家土産』第一回における「ヒツ／＼といふ泣声が」（p.8）を，「hi-hi to naki-goe ga」[24]（Part 1，Dai I Kwai，p.7）とするなど，「つ・ツ」表記をローマ字に反映させないものが，上記の例以外にも見られる。

近代には，すでに日本字音における-tの入声音が失われており，語末（文末・文節末）の内破音[t˺]を聞き分けることができず，意味を弁別

する要素にもならない。「peppe」のように文末・文節末の「つ・ツ」を反映させない表記の方が，当時の音声・音韻の実態には即していたといえる。その一方で，底本の日本語表記を忠実に再現しようとするならば，「チヨ」と「チヨツ」，「ペ」と「ペツ」とは区別して表記する必要がある。“t”表記は文末・文節末に「つ・ツ」表記が存在したことの標識であり，底本のあり方をより正確に表すために用いられたと考えられる。

このように，「peppe」のような表記も，「Chot」のような表記も，それぞれに道理があるが，両者が混在しているというのは，表記の規則としては不統一である。本稿で調査した三作品において，“t”表記の例は『雲霧』にのみ見られたことから，書写した作品や時期などによって，コンドルの表記意識が異なるのかもしれない。

ちなみに，キリシタン版のイエズス会編『日葡辞書』（本編1603，補遺1604）も，感動詞の語末に“t”を表記することで「語末促音」を表現しようとしており，「Vot.（おつ）」（本編），「AT.（あつ）」・「Yàt.（やあつ）」（補遺）の3語を見出しに立てている[25]。

以上，コンドルによるローマ字表記の資料に見られる特徴を見てきたが，コンドルの表記は当時において一般的なものであったのだろうか。

近代における代表的な日英対照の会話書として，アーネスト・サトウ『会話篇』Part I-III（Kuaiwa hen, twenty-five exercises in the Yedo colloquial, : for the use of students,with notes Yokohama: Lane, Crawford & Co. 1873）がある。Part Iは日英対訳の会話集，Part IIはその日本文への注解であるが，さらにPart IIIは『春秋雑誌　会話篇』と題せられ，Part Iのローマ字表記による日本語の対話文を，仮名文ならびに漢字仮名交じり文に直したものが収録されている。

本資料中に文末・文節末の“t”表記が見られれば，コンドル以外の使用者の例となるところであったが，Part I（東洋文庫所蔵本[26]）の会話テキストの中には，文末・文節末に“t”を表記している例は見つからず，またそれを和文テキストにしたPart III（松村明所蔵本[27]）にも，文末・文節末の「つ・ツ」表記は見つからなかった。サトウは『会話篇』において，ローマ字表記・和文テキストのいずれにおいても，文末・文節末の促音を連想させる表記をしていなかったことが分かる。

本節ではコンドルとサトウのローマ字表記を観察したが，コンドルは「つ・ツ」表記のある底本をローマ字に起こし，サトウは自ら会話文を創作したという違いがある。ローマ字表記における文末・文節末の「つ・ツ」表記に該当する成分の記述を明らかにするためには，近代から現代にかけてのローマ字表記を幅広く観察する必要がある。

5. 音声の文字化における文末・文節末の「つ・ツ」表記――『言語生活』・「録音器」

本節では現代における，特に録音機器の黎明期の音声の文字化資料を取り上げる。1.1.で述べたとおり，筆者は過去の聞き取り調査において，語末（文末・文節末）の「促音」を認識できないことを確認しているが，実際の音声の文字化においては，文末・文節末の「つ・ツ」表記はどのように現れるのであろうか。

1950年代以降，日本では録音器の利用が広まっていったが，国立国語研究所の雑誌『言語生活』（筑摩書房，1951-88。A5判）においては，第1号より，実際の音声を文字に起こした「録音器」の記事が掲載されていた。号によって，平仮名・片仮名の選択，漢字の使用，句読点や感嘆符・疑問符など記号類の使用，音の切れ目を表すための空白の使用などにはゆれがあり，当該号の担当者が自身の基準で文字化した

ものと考えられる。

本稿では，1950年代と1980年代の「録音器」の記事を確認し，文末・文節末の「つ・ツ」表記の使用について調査した。調査結果を整理したものが，表5である。

（表5：『言語生活』・「録音器」における文末・文節末「つ・ツ」表記の用例）

発行年	ページ総数	感動詞	オノマトペ	その他	計	備考
1951-59	274	84 (84.0)	0 (0.0)	16 (16.0)	100 (100.0)	第1-99号のうち94冊。
1980-88	145	40 (33.1)	4 (3.3)	77 (63.6)	121 (100.0)	第337-436号のうち39冊。

1950年代にはほぼ全ての号に「録音器」が掲載されている[28]が，1980年代には，半数以上の号で「録音器」は休載しており[29]，特に1984年は1年を通じて掲載がない。ただし，1986年は「各地の若者の会話」，1987年は「『東京のことば』聞き書」[30]をテーマとして，全ての号に「録音器」が掲載されている。

表5の結果を見ると，用例の多くが感動詞の用例であった1950年代に対し，1980年代になると「その他」の用例が大きく増えたように見えるが，1980年代の121例のうち70例が，第370号の「録音器」（「夏の高校野球実況中継 ラジオのことばとテレビのことば」，全6ページ）の用例であり，またその内訳は，「感動詞」4例，「オノマトペ」1例，「その他」65例である。下記の例（p.61，個人名は伏せた）のように，「その他」の用例が極めて多い。

> ツーランスクイズを行なったバッターであります。ピッチャー第一球は，スクイズッ，スクイズしたッ。どうか，つかまえたッ。ピッチャーとランナーホームイン。あーッとボール，落したッ。ホームインッ。一点をあげましたッ。スクイズ，成功ッ。ガッツポーズを見せますランナーの｛個人名｝，ホームインッ。ピッチャーボールを落しました。

この号においてのみ，文末・文節末の「つ・ツ」表記が多用された要因のひとつに，本号の談話資料が「実況中継」であったことが考えられる。まず，聞き手が対面する相手でなく，テレビ・ラジオの視聴者であるという前提が異なる。さらに上記の例のように，試合で点数が入るか否かという緊迫した場面においては，声の大きさや発話全体の音調をはじめ，話し方が変化するであろう。文字化の担当者は，そうした声量・音調などの音声的特徴に影響されて，それを文末・文節末の「つ・ツ」表記に反映させたのではないか。上記の「スクイズッ」や「スクイズしたッ」などを発声する場合，筆者の内省では声が大きくなるのはもちろん，末尾の「ズ」や「た」が通常より高くなる。

ちなみに，第370号の用例を除外すると，1980年代は139ページ・全51例となる。その内訳は，「感動詞」36例（70.6％），「オノマトペ」3例（5.9％），「その他」12例（23.5％）であり，「つ・ツ」表記の出現頻度，ならびに内訳の割合が，1950年代に近いものとなる。

以上，本節では『言語生活』・「録音器」における文末・文節末の「つ・ツ」表記を観察した。近年は大量の談話資料を文字化・分析した研究も多く存在し，現代における音声の文字化の様相を明らかにするためには，それらの資料を詳

しく観察する必要がある。

6. おわりに

本稿では，近代から現代にかけての文芸雑誌や漫画雑誌，日本語のローマ字表記，音声の文字化資料における文末・文節末の「つ・ツ」表記について調査・考察を行った。本稿における主な成果・主張を，以下に整理する。

ア．近代の文学作品においては，一部の著者が文末･文節末の「つ･ツ」表記を多用する。用例は感動詞に現れる場合が多い。（第2節）。

イ．漫画作品では1960年代以降，語末促音語形のオノマトペを漫画に書き添える用法が大きく広まる。また1980年までには感動詞・オノマトペ以外に「つ・ツ」表記を使用する例も増えており，2000年にはその傾向がさらに強まっている（第3節）。

ウ．近代のローマ字資料において，文末・文節末の「つ・ツ」表記の該当箇所に，“t”表記をあてはめる例が見られる。（第4節）

エ．音声の文字化に際し，一部の性格の談話資料において，「つ・ツ」表記が多用される場合があり，それは声の大きさや発話の音調など，「促音」とは異なる音声的要素を反映させたものではないかと考えられる。（第5節）

本稿の調査では近代の資料の比重が大きくなり，現代の資料をあまり扱うことができなかったが，現代においても，誰もが同じように「つ･ツ」表記を使用するわけではない。参考までに，2015年現在の一部の文芸雑誌について，『文學界』第69巻第11号（文藝春秋，2015年11月，A5判）では，6名（＋著者名不詳1名）の著者が全312ページ中23例（「感動詞」14例，「オノマトペ」2例，「その他」7例），『すばる』第37巻第11号（集英社，2015年10月，A5判）では，6名の著者が全360ページ中13例（「感動詞」5例，「オノマトペ」8例），『オール讀物』第70巻第10号（文藝春秋，2015年9月，A5判）では，11名（＋著者名不詳1名）の著者が全484ページ中46例（「感動詞」35例，「オノマトペ」2例，「その他」9例）の文末・文節末の「つ・ツ」表記を使用している。これらに対し，いわゆるライトノベル[31]を掲載する『ドラゴンマガジン』第28巻第6号（KADOKAWA, 2015年11月, B5判）では，14名以上[32]の著者が，全322ページ中593例（「感動詞」163例，「オノマトペ」54例，「その他」376例）の「つ・ツ」表記を使用している[33]。これは，ライトノベルというジャンルにおいて，「つ・ツ」表記」の用例がごく現れやすいことを示す数字であろう。現代の文末・文節末の「つ・ツ」表記は，近代とはまた異なる様相を呈しているようである。

今後，本稿のテーマに関する研究を継続するにあたり，調査資料の種類や年代の範囲を広げることで，より多角的な考察を行いたい。

注および参考文献

[1] 石川創「感動詞の認識に関する音声上の問題について」（『駒沢女子大学研究紀要』21，2014），および石川創「感動詞の『別語』認定をめぐる問題について」（『早稲田日本語研究』24，2015）。聞き取り調査の成果は後者におさめている。

[2] 国立国語研究所編『太陽コーパス　雑誌『太陽』日本語データベース』（博文館新社，2005）。

[3] 石川創「感動詞の認識に関する音声上の問題について」。注1参照。

[4] システムの著作権は山口昌也氏（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所）が保持している。本稿の調査で用いた『ひ

まわり』は，ver.1.5.3である。

[5]本文は『太陽コーパス』を全文検索システム『ひまわり』ver.1.5.3から引用した結果より，直接引用したものである。以下も同様。

[6]本稿では，雑誌名を除く漢字の旧字体を新字体に，変体仮名を現行の仮名字体に改めた。

[7]「文字数」については，『太陽コーパス』付属の「CD-ROM用解説書」，p.4より引用した。また「備考」の欄には，『太陽コーパス』に収められている雑誌の号数を示した（同解説書，同ページより引用）。

[8]オノマトペの語末促音語形については，那須昭夫「オノマトペの語末促音」（『音声研究』11-1，日本音声学会，2007）が，「オノマトペの形態現象を観察すると，至るところに促音語尾を伴った語形が見出される」，「そもそも日本語では促音終わりの語形は一般に認められない。その中にあって，オノマトペだけは促音終わりの語形をむしろ豊富に備えている」（いずれもp.47）と指摘している。

[9]石川創「感動詞の認識に関する音声上の問題について」，注1参照。なお，「エヘッ」（笑い），「チヨッ」（舌打ち）など，今回の調査では「感動詞」の用例としたが，オノマトペとの境界線が曖昧なものもある。

[10]「著者名不詳」として数えたものには，海外文学を翻訳した作品において，原著者のみを記し，翻訳者名を掲載していないようなものも含む。

[11]『〔復刻版〕白樺』（岩波ブックサービスセンター，1988-89）にて確認した。

[12]本稿ではくの字点のくりかえし符号を，「＼／」と表記した。

[13]『「文藝戰線」複刻版』（日本近代文学館，1968）にて確認した。以下，本文の引用も複刻版を用いた。なお，109例のうちの1例に作者不詳のものがある。

[14]雑誌『小学二年生』について，国立国会図書館では注15の「プランゲ文庫」の資料をのぞき，第一期は第1巻第1号，第5巻第4号，第13巻 第2・8号，第15巻 第11・12号 の6冊，第二期は第2巻第6号，第3巻第10号，第4巻第4号，および第4巻第7号以降のほぼすべての号が所蔵されている（請求記号Z32-359）。

[15]本稿の調査資料においては，『小学二年生』第二期の第3巻第2・3・6・11・12号，および第4巻第1・2・3・5・6号が「プランゲ文庫」に該当する（マイクロフィッシュ，請求記号VH1-S2018）。なおプランゲ文庫は，国立国会図書館の憲政資料室所蔵の資料のうち「日本占領関係資料」に該当する。

[16]今回調査した資料のうち，第一期の6冊の書名はいずれも「セウガク二年生」であり，第二期は第2巻第6号の書名が「こくみん二年生」，その他は「小学二年生」である。

[17]号によっては付録の冊子がついているものがあり，それも調査の対象とした。なお「ページ総数」について，第1巻第1号のみページ番号が付されていないため，表紙および裏表紙を除いたページ数を「ページ総数」に加えた。

[18]「プランゲ文庫」（注15）に該当する号は国立国会図書館に原本の所蔵がなく，確認できなかった。その他は，第一期の6冊が菊判，第二期の1960年以降の3冊がB5判，その他はA5判またはそれに近い判型（148×210，148×206，148×216のいずれか）である。

[19]1946-50年において調査した16冊は，第2巻第6号，第3巻第2・3・6・10・11・12号，第4巻 第1・2・3・4・5・6・10・11号，第5巻第10号。

[20]「画鬼・暁斎　KYOSAI――幕末明治のスター絵師と弟子コンドル」展図録（三菱一号館美術館，2015）のうち，「第II章　コンドル――近代建築の父」および「第III章　コンドルの

日本研究」の章解説（いずれも阿佐美淑子執筆，p.36,45）によれば，コンドルは「日本の近代建築の父」と呼ばれる建築家である一方，日本の文化と伝統に対し深く興味を抱き，三遊亭円朝の落語をアルファベットに書き起こすことも行っていたという。

[21]『Dōchū hizakurige』は早稲田大学図書館蔵（請求記号：へ13 02626），『道中膝栗毛』8編続12編（請求記号：120-53）および『浮世道中膝栗毛』全五冊（請求記号：特40-58）は国立国会図書館蔵の資料を確認した。

[22]『Ezo. Nishiki. Kokyō no Ie-zuto』は早稲田大学図書館蔵（請求記号：へ14 02629 1-2），『蝦夷錦古郷の家土産』は国立国会図書館蔵の資料を確認した（請求記号：特10-616）。

[23]『Kumokiri』は早稲田大学図書館蔵（請求記号：へ14 02625 1-3），『雲霧』は国立国会図書館蔵の資料を確認した（請求記号：特10-961）。

[24]『蝦夷錦古郷の家土産』に見られる「いふ」に対応するローマ字表記はない。

[25]長崎版日葡辞書のOxford大学Bodleian Library所蔵本（『日葡辞書』，勉誠社，1973），および土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店，1980）による。

[26]『アーネスト・サトウ著　会話篇I・II　複刻版』（東洋文庫，1967）を確認した。

[27]松村明『増補　江戸語東京語の研究』（東京堂出版，1998）に収録されている，「サトウ『会話篇』第三部　『春秋雑誌　会話篇』第二冊」（影印，pp.421-522），および「サトウ『会話篇』（仏訳本）第三部　『春秋雑誌　会話篇』全一冊」（影印，pp.523-563）を確認した。松村は同書の「『春秋雑誌　会話篇』攷――サトウ『会話篇』書誌覚書」（pp.351-419）において，『会話篇』諸本の書誌や異同，「Part I」のローマ字表記と「Part III」のかな表記の対応の問題等を詳しく論じている。

[28]第37，51，59-61号の5冊にて休載。

[29]掲載されているのは，第338，341，342，344，349，353，357，358，360，366，370，372，373，376，408，410-433号の39冊。

[30]第422-433号。すべて秋永一枝により行われた。なおこのテーマにおける全12回分の「録音器」は，すべて3ページ＋1段分の誌面に掲載されているが，「ページ総数」においては，この12回分をすべて4ページ（計48ページ）として計算した。

[31]メイナード，泉子・K『ライトノベル表現論』（明治書院，2012）では，「ライトノベル」を「アニメ的なイラストが添付された，中高生を中心としながらも成人をも読者に含む娯楽文芸作品群」（pp.3-4）と定義している。

[32]著者名が明らかなのは小説作品を執筆した14名であるが，小説作品以外の特集記事などに複数の用例が見られる。

[33]これらは，小説をはじめとする読み物だけの用例数である。『文學界』・『オール讀物』・『ドラゴンマガジン』には漫画作品も掲載されているが，それらに見られる「つ・ツ」表記は集計の対象から外している。

なお，本稿において「国立国会図書館蔵」とした資料については，『国立国会図書館デジタルコレクション』（http://dl.ndl.go.jp/）にて閲覧したものである（注15に示した憲政資料室所蔵の「プランゲ文庫」の資料をのぞく）。ただし一部の資料は国立国会図書館内，または国立国会図書館の「図書館向けデジタル化資料送信サービス」に参加する一部の公共図書館・大学図書館等でなければ閲覧ができない。